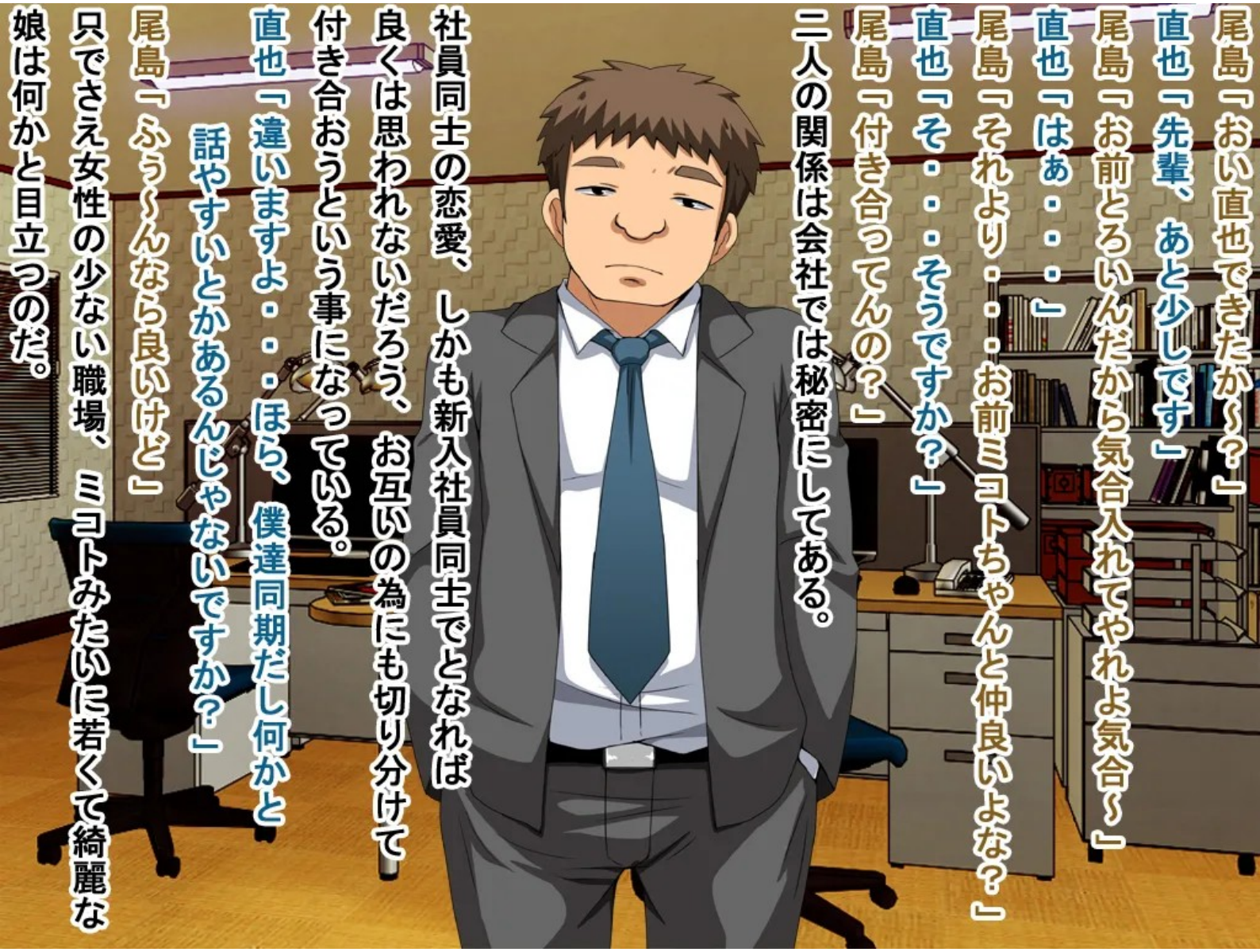
僕の彼女と先輩の関係
彼には知られたくない・・・
※実際にはモザイク修正です。

直也「ふぁっ・・・」
ミコト「ふふっお疲れみたいね直也君♪」
直也「ミコトちゃん・・恥ずかしい所見られちゃったな」
まだ仕事に慣れてない為か不意にあくびが出てしまった。
ミコト「がんばってね」
直也「あぁ・・・」
実はミコトと俺は付き合っている、同期で入社した彼女は
驚くべき事に幼馴染だった、思わぬ再開にお互い運命を
感じたのか自然と付き合う関係になった。
とは言っても付き合い始めて2ヶ月、デートらしい事も
出来ず仕事に追われる日々だった。
ミコト「終わったら・・・いつもの所でね・・・」
仕事終わりお気に入りの店で食事をする位の付き合いが
続いていた、そろそろ進展も欲しい所だが・・・
直也「うん・・・分かった」


尾島「おい直也できたか～？」
直也「先輩、あと少しです」
尾島「お前とろいんだから気合入れてやれよ気合～」
直也「はぁ・・・」
尾島「それより・・・お前ミコトちゃんと仲良いよな？」
直也「そ・・・そうですか？」
尾島「付き合ってんの？」
二人の関係は会社では秘密にしてある。
社員同士の恋愛、しかも新入社員同士でとなれば
良くは思われないだろう、お互いの為にも切り分けて
付き合おうという事になっている。
直也「違いますよ・・・ほら、僕達同期だし何かと
話やすいとかあるんじゃないですか？」
尾島「ふぅ～んなら良いけど」
只でさえ女性の少ない職場、ミコトみたいに若くて綺麗な
娘は何かと目立つのだ。

日も落ち残っている社員は僕とミコト、そして先輩の尾島だけだった。

ミコト「ごめ～んまだ終わりそうにないの・・・・」

直也「じゃあ例のお店で待ってるよ」

ミコト「ごめんね・・・すぐ終わらせて行くから・・・」

尾島には聞こえないように小声で話す二人。

直也「お先に失礼しまーす」

尾島「おう」

普段なら真っ先に帰っている尾島が今日に限って残っていた、そんなに仕事が遅れているのかと疑問に思いつつ直也は会社を後にする。

尾島「（よし・・・これで二人っきりになれたぜ・・・ここは何とか距離を縮めたい所だが・・・）」

ミコト「尾島先輩、お茶でも入れましょうか？」

尾島「いや大丈夫だよ、それより・・・」

ミコト「はい？」
尾島「貰い物なんだけど食べる？チョコ」
ミコト「わぁこれってあの高いお店のじゃないですか？」
尾島「(まずはお菓子で釣る作戦・・・上手く行ったな)」
ミコト「じゃあ遠慮なく頂きます♪」
尾島「どうぞどうぞ・・・へへっ」
ミコト「あぁ美味しい～」
尾島「喜んでくれてよかったよ」
ミコト「尾島せんぱいありがと・・うございます」
尾島「ミコトちゃん？大丈夫」
ミコト「だいじょうぶれす・・・」
尾島「・・・もしかして・・・お酒入りのチョコか？」
尾島があげたチョコは少量ながらお酒が入っており
どうやらミコトはそれに酔ってしまったようだ。
尾島「参ったなぁ・・・あ、ミコトちゃん危ない！」

だいじょうぶですよ～
せんぱ～いあははっ
そんな事言っても
やばっ良い匂い・・・
やっぱ胸でけぇゴクリ
ちょっと位・・・

手が滑った・・・
うおおおっミコトちゃんのおっぱい・・・これはやれるんじゃないか？
あははっくすぐったいですよ～・・・

くすぐった・・・・い・・・
むにゃむにゃ・・・・
ごめんね・・・
暑くない？服
脱いでみる？
はぁはぁ良いぞこの調子
なら・・・・まずは服を
脱がしてへへへっ
あつ～いです・・・
ふく・・・・ぬぐっ

直也「ふぅ・・・ミコト遅いな・・・そう言えば先輩は
もう帰ったかな・・・？」
一瞬、会社で二人っきりになったミコトと尾島の姿を
思い浮かべる。
直也「流石に何もないだろ・・・もう少し待つか・・・」

二人意外誰もいないオフィス、酔って朦朧としたミコトの服を脱がせミコトの体を貪るように弄る。

碌に聞き取れていないであろうミコトに強引な返事を求めた。

ミコトを机に寝かせ自身のイチモツをミコトの秘所に押し付けた。
あぁん
んっ
じゃあそろそろ・・・
本番だ、へへへっ
こんな時が来るなんて

はぁはぁ綺麗だ・・・
へへっ頂きま～す♪
行くよミコトちゃん

うおおっおいおい
マジかよ・・へへっ
ミコトちゃん処女だ
ズブブブ
ぅぅ
あぁ

ラッキ～ミコトちゃんの初ま〇こは俺の物だ
ぐ
あっ

直也「流石に遅いな・・・何かトラブルでもあったのか？
一応メールだけしておくかな・・・」
何も知らずに待ち続ける直也は先輩の尾島に犯されている
ミコトにメールを打つ。

尾島はミコトが朦朧としているのも無視して快楽に任せ
腰を打ち付ける。

はぁはぁおっぱいも
でかくいし目をつけてた
甲斐があったぜっ
あっ
フルっ
ズッズッ
グチュッ

もっと激しくしちゃうよ
へへへっあぁ気持ち良い
あっ
フゥ
ズッズッ
グチュ

ミコトちゃんも俺の
ち○ぽ気持ちいかい？
はぁはぁへへっ♪
あっ
フルっ
ズブッ
ズブッ

直也「メール送ったけど返事も来ない・・・本当に
何かあったんじゃ・・・いや・・・仕事が大変
何だろう・・・でもこのまま待っててもなぁ
仕方ないから今日はキャンセルって事でもう一回
メールしておくか」

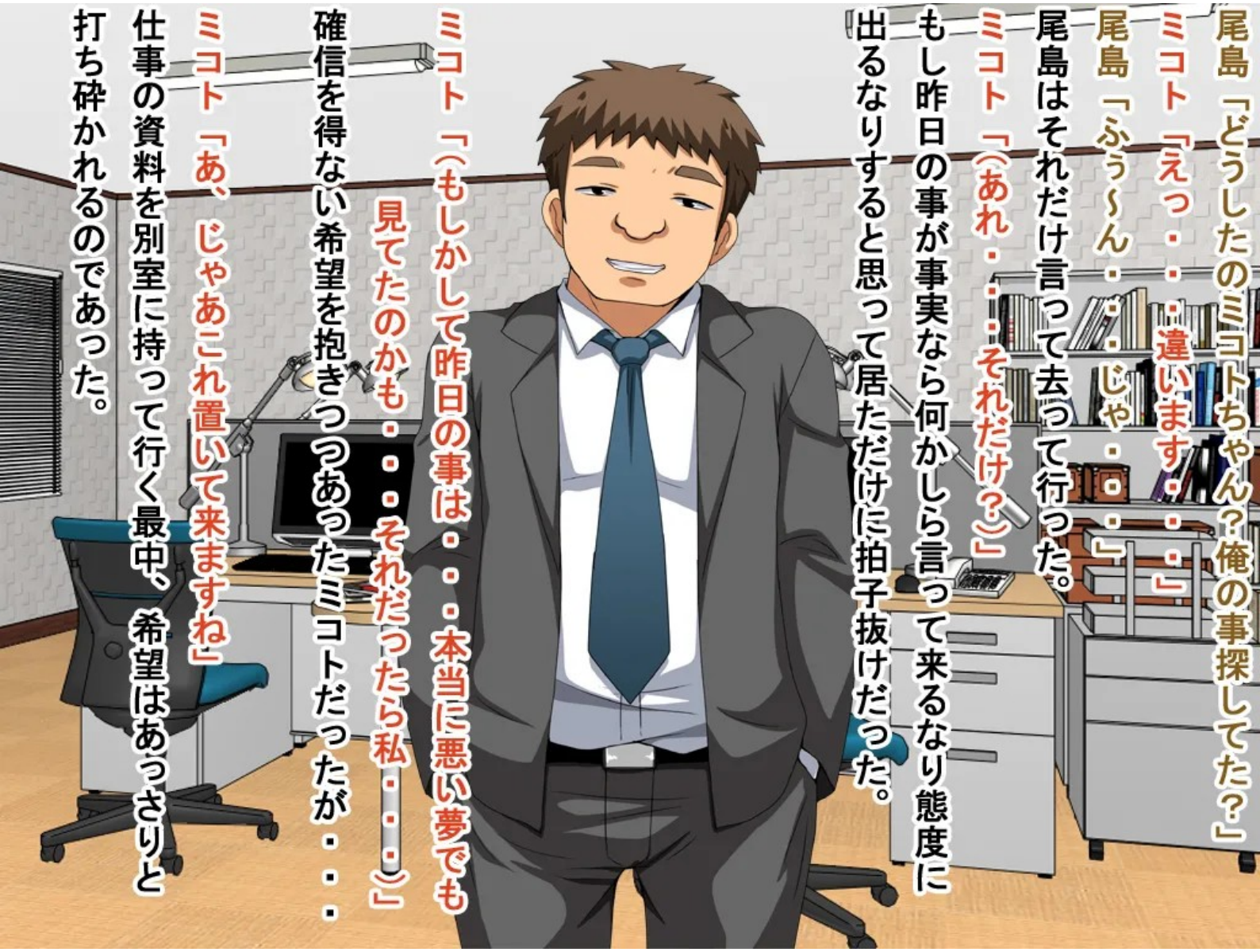
無意識の中抵抗の声を漏らすミコトだったがお構いなしに
突き続ける。

尾島は腰を深く落としミコトの奥へとイチモツを潜らせると身を震わせた。

尾島のイチモツはビクビク震えミコトの奥へと注ぎ続けた。

ミコト「ふぁっ・・・あれ私、いつの間に・・・」
目を覚ましたミコトはすぐに異変に気づいた。
ミコト「な・・・なんで私、裸・・・えっ??」
裸の自分に驚くのは当然だが更にその横に裸の尾島が眠っていたのだ。
ミコト「嘘っ・・・私・・・えっ?」
困惑し動揺が隠せなかった、そんなミコトにメールが届く、直也からだ。
ミコト「直也君・・・?今日は・・キャンセルって・・」
時計に目をやるとずいぶんと時間が経っている事に気がついた。
ミコト「そんなっ・・・私・・・先輩と・・・??」
微かに残る覆い被さる男の影、ミコトは急いで身なりを整え会社から逃げるように出る。
ミコト「嘘だっ・・・でももし本当に先輩としたなんて私初めて・・・うぅ・・・悪い夢でも見たんだ」
現実を認めたくない一心で足早に帰宅した。

次の日
ミコトは落ち着かない様子で仕事をしていた。
昨日の事を考えれば当然だろう、いっそ休みたいとすら思ったが間違いであって欲しいと希望を捨てれずに居た。
直也「昨日はどうしたんだ？返事も返って来ないし・・・」
ミコト「えっ・・・その・・・うん、ごめんね・・・仕事が遅くなっちゃって・・・」
昨日の事が事実なら一番知られたくない人が話しかけて来たのだ、動揺し曖昧な返事を返す。
直也「そっか・・・まぁ無理はするなよ、予定なんて幾らでも変更できるんだから・・・」
ミコト「うん・・・ありがとう・・・」
ミコトは直也に返事を返しつつも目線はある男を探していた。


尾島「どうしたのミコトちゃん？俺の事探してた？」
ミコト「えっ・・・違います・・・」
尾島「ふぅ～ん・・・じゃ・・・」
尾島はそれだけ言って去って行った。
ミコト「（あれ・・・それだけ？）」
もし昨日の事が事実なら何かしら言って来るなり態度に出るなりすると思って居ただけに拍子抜けだった。
ミコト「（もしかして昨日の事は・・・本当に悪い夢でも見てたのかも・・・それだったら私・・・）」
確信を得ない希望を抱きつつあったミコトだったが・・・
ミコト「あ、じゃあこれ置いて来ますね」
仕事の資料を別室に持って行く最中、希望はあっさりと打ち砕かれるのであった。

尾島「ミコトちゃん！」
ミコト「ひっ！・・・あっ尾島先輩・・・何か？」
尾島「へへっ何か？ってそっけないなぁ、昨日は
あんなに愛し合ったじゃないかぁ」
ミコト「きの・・う・・・そんなっ・・・夢じゃ」
尾島「何言ってるんだい、ミコトちゃんの初ま○こ
気持ち良かったなぁへへっ」
ミコト「いやっ・・・やめてっ！」
尾島「やめてっかぁ可愛いなぁ、ていうかさ俺達
ちゃんと付き合おうぜ、一晩で終わらせるのは
もったいねぇへへっ」
ミコト「嫌ですっ・・・」
尾島「へぇ断るんだぁじゃあみんなにミコトちゃんと
寝たって言いふらしても良いの？」
ミコト「・・・卑怯者・・・」
尾島「へへっ何とでも言いなよ」

尾島「はぁ・・・まぁ良いや・・・じゃあさ咥えてよ？」
ミコト「くわっ・・・えっ・・・？」
尾島「付き合わなくて良いから俺を気持ちよくして
くれって言ってんの」
ミコト「酷いっ・・・」
尾島「断るなら・・・」
ミコト「(もしばらされたら直也君にも知られてしまう)」
尾島「どうする？」
ミコト「分かった・・・分かったわよ・・・」
尾島「へへっじゃあこっちでさ・・・」
尾島は人通りの少ない薄暗い通路に誘い込むとズボンを
下ろしイチモツを見せ付けた。
尾島「ほらっ早くしろって・・・」
ミコト「うぅ・・・」
尾島「こうするんだよ！」

おほぉっミコトちゃんの
口ま○こ暖かくて良いよぉ
気持ち良い～
んぐっ!!
ズズズズ

へへっ抵抗しても駄目だよ
ほら動かすぞっしっかり
味わってくれ♪
うんうんっっっ

はぁはぁやべっ・・・
口も良いけど下の口も
楽しみたいな♪
んー。
んー。

直也「あれ・・・?そういえばミコトが居ないな・・・
さっき資料がどうとか言ってたけど・・・それに
先輩も・・・先輩はサボりだな・・・」
二人が居ない事に多少の違和感を感じつつもさほど
気に留めなかった直也だったが・・・

へへっ気持ち良いよぉ
ミコトちゃんの中は♪
何回突いても吸い付く
ぅぅぁあ
やだぁぁ！
あっ
ズチュッ
グチュッ

ミコトちゃんも気持ち良いでしょ？俺のち〇ぽをこんなに締め付けて
ちがっ あっ いやあ
あっ
ズチュッ
グチュッ

おっおぉ締まる～そろそろ出すよへへっ良いだろ？もう一回出してるんだし
やだやだやめあぁ
あっ
ズチュッ
グチュッ

あ・・・暴れるから逆に
刺激が・・・うぅでるっっ
はぁはぁへへへっ
ドピッッ
ビュルルッ
やぁ
うぅ…やぁ
ひっ

尾島「あぁすっきりした♪気持ち良かったよミコトちゃん
まぁまた頼むよ、俺が飽きるまでなへへっ」
ミコト「うぅ・・・うっ・・・ひっく・・・なんで・・・
こんな事に・・・」
尾島「へへっ泣くほど気持ち良かったか？これから
たっぷりそのエロい体で楽しんでやるよ♪」
ミコト「さいてい・・・」
尾島「なんとでも・・・おっとそろそろ帰らないと
怪しまれるぞ・・・」
ミコトは零れる涙を必死で拭い身なりを整える為トイレに
駆け込んだ。
尾島「可愛いねぇ・・・こんなチャンスねぇからな
ガバガバになるまで使ってやる・・・へへっ」

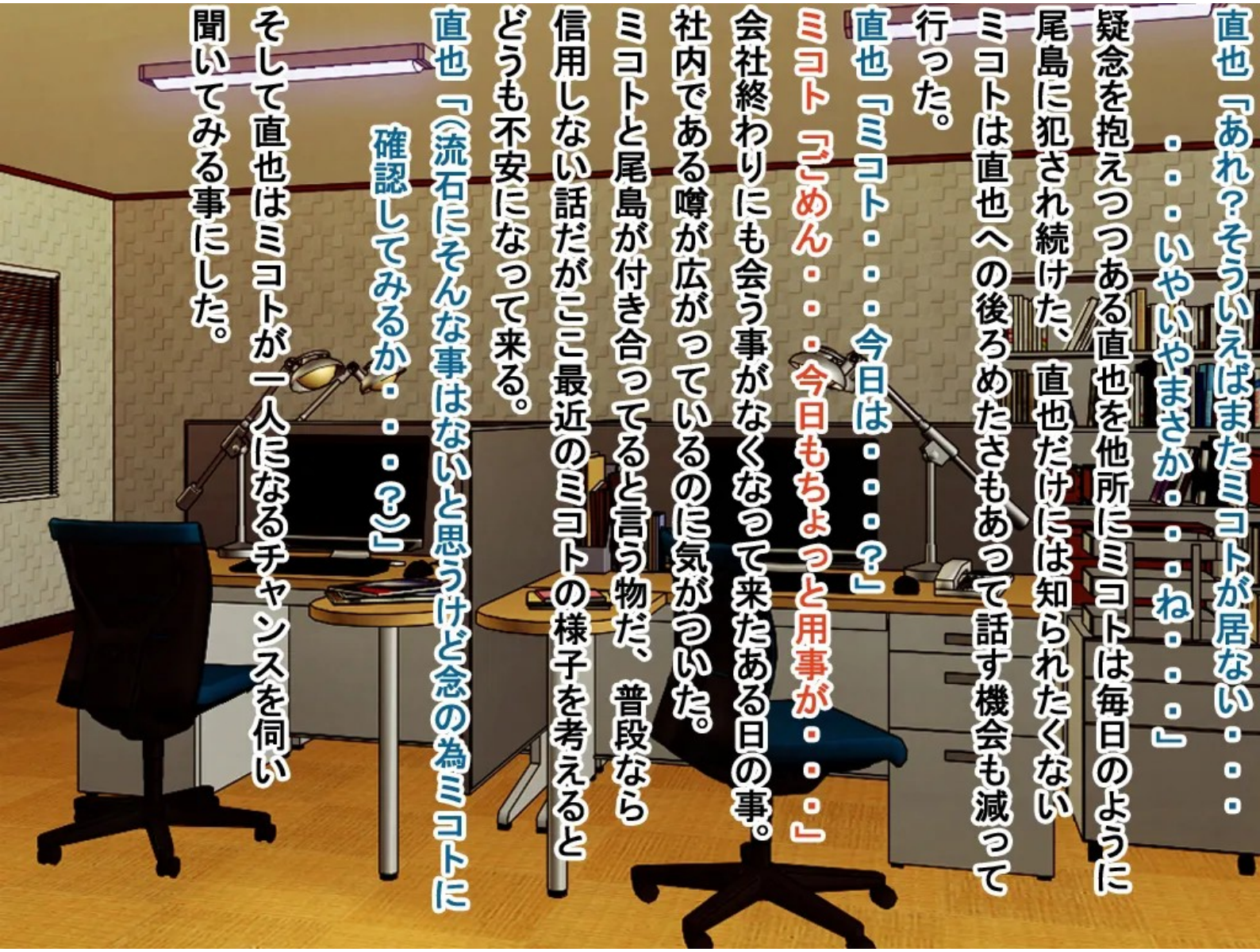
直也「あれ？ミコト遅かったな・・・？」
ミコト「えっ・・・うんちょっと・・・」
目線を反らしながら小声で応えるミコト。
直也「・・・どうしたのかな、様子が変だ・・・」
尾島「おぅ直也、頑張ってるか？」
直也「先輩？はい・・・？」
尾島「そうか頑張れよ～」
ミコトとは対象的に上機嫌の尾島に違和感を感じる。
尾島はその日以来、頻繁にミコトの体を求めてくるようになった、場所や時間も関係なしにやりたい時にやる。
ある日はトイレの中で・・・

直也「ふぁっ疲れた・・・」
休憩中、直也はトイレに用を足しに来ていた。
あっ・・・んっっ・・・だめっ・・・
直也「んっ？」
直也意外誰も居ない筈のトイレで微かに聞こえてくる
甘い声に気がつく。
直也「（誰か居るのか・・・女・・・？まさか・・・）」
んっあぁっ・・・やぁっ・・・あっあっ・・・
直也「（間違いない誰かやってるなっ！？会社でよく
やるなぁ・・・誰と誰だろ・・・）」
女性の少ない会社なだけに妄想が膨らむ。
直也「（気になるけど・・・気づかなかった事にするか）」
直也は誰とも知れない二人の関係を邪魔するのも野暮だと
気を利かしたつもりだったが・・・

誰かに気づかれるから・・・やめっ
やぁ
構うもんかへへっ良いぜ～締まる締まる緊張感でまた興奮するんだよなぁ
ズブッ
ズブッ

へへっ気持ち良くなって来たか?うん?甘い声が漏れてるぞ♪
あぁ♥
あっ♥ひっ♥あ♥
ズブッ
ズブッ

否定しようとも突かれる度に声が漏れる。



直也「あれ？そういえばまたミコトが居ない・・・・・・・いやいやまさか・・・ね・・・」
疑念を抱えつつある直也を他所にミコトは毎日のように尾島に犯され続けた、直也だけには知られたくないミコトは直也への後ろめたさもあって話す機会も減って行った。
直也「ミコト・・・今日は・・・？」
ミコト「ごめん・・・今日もちょっと用事が・・・」
会社終わりにも会う事がなくなって来たある日の事。
社内である噂が広がっているのに気がついた。
ミコトと尾島が付き合ってると言う物だ、普段なら信用しない話だがここ最近のミコトの様子を考えるとどうも不安になって来る。
直也「（流石にそんな事はないと思うけど念の為ミコトに確認してみるか・・・？）」
そして直也はミコトが一人になるチャンスを伺い聞いてみる事にした。

直也「ミコト！」
ミコト「きゃっ・・・直也君・・・！？」
直也「ちょっと聞きたい事があるんだけど・・・」
ミコト「・・・！？今は・・・ごめん・・・」
直也「ミコトっ！・・・今日・・・いつもの店で待ってる
遅くなっても良いから・・・来てくれ・・・」
ミコト「・・・うん・・・」
ミコトはそれだけ答えると足早にその場から去った。
直也「やっぱり何か変だ・・・店には来てくれるって
約束したし・・・もう一回ちゃんと聞かないと」
尾島「おぅ・・・何してんだこんな所で？」
直也「尾島先輩・・・（この人にも聞いてみるか？）」
尾島「なんだぁ？俺の顔に何かついてるか？」
直也「尾島先輩・・・噂・・・ミコトちゃんとの・・・」
尾島「おっ何だ？お前も知ってたか？」

直也「・・・噂ですよね？」
尾島「本当だぜ？俺はミコトちゃんと付き合ってるだ♪」
直也「へっへぇ・・・（まてまて・・・落ち着け・・・）」
尾島「ここだけの話だけどよミコトちゃんおっぱい
でけぇしあそこの締まりもすげぇ良くってなへへ」
直也「はぁ・・・（こいつ・・・）」
尾島の話は信用できないと思いつつもどこかで本当
だったらと思う自分が居る。
尾島「ミコトちゃん処女だったけど俺がしっかり仕込んで
やったおかげで俺のち〇ぽ大好きになったみたい
今日も仕事終わったらホテル直行よ♪」
直也「そうですか・・・」
嘘だ嘘だと頭の中で繰り返す、それに今日は俺との約束が
あるんだと怒りや不安の入り混じったまま仕事に戻った。

仕事も終わりいつもの場所に来ていた。

直也『ふぅ・・・きっと嘘だ、あの先輩だから適当な事言ってからかってるに違いない』

ミコトを待ちながら独り言を呟く。

しばらく経って時計を確認する。

直也「・・・まだかな？・・・」

その頃ミコトは・・・

今日はたっぷり可愛がってやるからなへへっ・・・おらっおらっ！
ズッジュッ
パンパンッ
あっ♥
あっ♥

あぁ気持ち良い～本当
何度やっても良いぜ
はぁはぁへへっおらぁっ
ひっ♥
あぐっ♥
ズッジュッ
パンパンッ

直也「遅い・・・嘘だと信じたいけど・・・電話してみるか・・・」

しばらく待っていると繋がった。

直也「あっもしもしミ-コト・・・?おーい・・・?」

繋がったが出ない、反応がないので不思議に思っていると

「あっあぁあっ尾島先輩のおち○ぽしゅごいっっ奥を突いてくるのおっあぁっうっくううあぁぁっ」

直也「なっ・・・」

ミコトは電話に出たのではなく偶然通話状態になってしまっていたのだ。
欲しいですっ私のお〇んこにください いっぱいいっぁぁっ
へへっずいぶん素直になったもんだ、そんなに俺のち〇ぽが欲しいか？
ん♥
あっ♥
ズチュッ
ズチュッ
通話中

今日もたっぷり中に出してやるからな♪しっかり味わえよ！
尾島先輩のいっぱい中に出してってはぁはぁあぁぁっ
んっ♥
あっ♥
ゲイッ
ゲイッ
通話中

ん♥
あっ♥
あぁっすごっいっ
出てる私の中に・・・
ビクビクッって♪
ドピュッ
ビュッビュッ
ううっでるでるっ♪
ミコトちゃんのお○んこ
最高だぜへへっ
通話中

「あっんっまだ出てる・・・先輩の濃いの・・・」

直也『・・・・』

決定的だった、声の主は間違いなくミコトそして尾島の物だった。

直也「そんな・・・ミコト・・・なんで・・・」

ミコトは直也に知られたくない為、我慢し続けた結果ミコトは快楽に溺れて居たのだ。

直也は何故そうなったのかも見当もつかず突然突き付けられた尾島で感じるミコトの声。

直也『ははは・・・悪い夢でも見てるのかな・・・？

ははは・・・・・・帰ろう・・・』

もうここに居る意味を失った直也はミコトに別れのメールを送信しつつ去った。

ミコトがそれを見るのは尾島の腕の中で起きた時何もかもが手遅れである事を知るのだった。

おわり

あっ
ぶぷぷ
んっ

あっ
ズチュッ
ヴチュッ
あっ

やっ
ぐいっ
ぐいっ
あっ

ん？
ん？
ズブッ
ズブッ

ズムッ
プチュッ
やぁっ
やっ

ずくずくずく

ズブッ
ワレメ
あっ♥
んっ♥

ズドッ
ズドッ
あっ
通話中
うっ♥

通話中

通話中